

# 総合基礎実技を体験して－「人間らしさ」の尊重－

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 京都市立芸術大学美術学部 公開日: 2024-03-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 富田, 直秀 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.15014/0002000214">https://doi.org/10.15014/0002000214</a>

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 4.0 International License.



# 総合基礎実技を体験して —「人間らしさ」の尊重—

Experiencing “Foundation Core Courses”  
in Kyoto City University of Arts:  
Respect for the “Smell of Humanness”

Naohide Tomita **富田直秀**

---

## 1. 現代社会が忘れかけている知恵

筆者は、2021年度から2023年度にかけての3年間、京都市立芸術大学（以後京都芸大）の総合基礎実技授業に特例として参加させていただきました。受け入れていただきました教職員・学生の方々に心から感謝をいたします。筆者は工学と医学の立場から様々な開発研究を行ってきましたが。科学・技術の現場や現代社会全体が忘れかけているある知恵が、総合基礎実技授業には今もイキイキと息づいている（参1）、と実感したことが、本授業への参加を希望した動機の一つでした。その知恵とは、たとえば現代社会で失われつつある「人間らしさ」（註\*）を尊重する習慣のようなものですが、「人間らしさ」とは何かと問われますと、その意味はそれぞれのヒトによって異なるのだと思います。けれども、もし現代社会に生活する様々なヒトがこの総合基礎実技に参加したならば、それがそれぞれに、筆者とは異なった知恵を発見するのだろうと考えます。たとえば、筆者が総合基礎実技に参加させていただいたのは、ちょうどロシアがウクライナへの軍事侵攻を始めたころでもあります。もし、ロシア大統領のプーチンが京都芸大の総合基礎実技を経験していたならば、別の行動を選択していたであろうに、と筆者は（確たる理由もなく）

確信をしています。また、不登校となり、卒業せずに京都大学を去っていったある学生さんを思うと、もし彼が京都芸大の総合基礎実技に参加していたならば。別のもっとおもしろい選択もあったであろうに、とこれも（確たる理由もなく）確信をしています。

## 2. できてしまうこと

工学の大学院を修了してから医学部を再受験した筆者は、「役に立つ」という看板を背負って医学生時代から開発研究にかかわってきました。工学の知識を医療現場に生かす様々な技術が、「役に立つ」ためには技術的な目標を設定してその目標に到達するための最適化を行います。たとえば、人工関節の擦れる部分の破壊を防いで耐久性を増す、とか、身体に埋入された再生医療材料が安全である、といった機能を定量的に測定し、設計し、また効果の確認をします。さらに、技術の原理を説明する（論文を書く）ことも重要な仕事でした。

このように事実を確認しながら設計・制御し、記述していく作業自体には何の疑問もないのですが、妻が医療事故によって死の直前にまで至ったこと、そして福島の原発事故などを経験するなかで、目標を定めて客観的にその最適化を行うという科学・技術の方法論

だけで「役に立つ」に至ろうとすることに疑問を持つようになりました（参1）。

たとえば、「安全性」を目標とするためにはまず前提条件を定めてその想定範囲内での安全性を最適化します。しかしそれだけでは、想定外の危険性は文字どおり想定し得ないので「安心」ではありません。どこまで真摯にその人の身になって想定範囲を定めるのか、といった感性の問題が、結局のところ本当の安心にかかわってきます。目標を定めて最適化を行う技術的な方法自体は否定しませんが、たとえば、医療事故にも福島の原発事故にも、「できる」に至る技術的な方法論への慢心があったのだと思います。

もちろんのことアートの分野でも、「できる」という技術的な慢心はあります。けれども、筆者は「できてしまう」と思うアーティストがおられることにとても興味を持ちました。それは単純に謙虚であるだけではなく、モノとヒトとの身体的な関係性の要点が「できてしまう」にあるように思えたからです。そうして、本来「役に立つ」をめざしていないはずのアートの視点にこそ、現代社会における「役に立つ」の本質があるとも直感しました（参2）。前述のように、科学・技術の現場や現代社会全体が忘れかけている本質的な知恵が、ここにはある、と考えたわけです。当のアーティストたちにとって、この身体的な知恵はあまりにもあたりまえで、あえて説明をする必要はないのですが、SDGsの例がよく表していますように、わかりやすく説明しなければ許されない社会風潮や、実際の制度が少しずつ増えてきました。ここで述べます知恵は、アート分野の方々にとっては言うまでもない当然の内容なのですが、その当然が他の分野から見ると、どのような風景が見えるのか、を記述してみたいと思います。

### 3. 虐げられた子供とおじいちゃん

総合基礎実技に参加し始めて、まず筆者が直面したのは、十代の若い人たちの群れの中にはつんと立たねばならない焦燥でした。新型コロナ感染禍は、高齢者を守れ、との号令の下で、比較的の症状が軽いであろう若者に対しても耐え難い不自由と苦痛とを強いてきました。もし筆者が彼らの立場、つまり閉ざされた環境からやっと大学の新天地に抜け出した立場であったならば、そこにぽつんと立っているご高齢者様をどう扱うのだろうか、などと想像してみると、いたたまれな

い気持にもなるのでした。ご高齢の新入生もおられるのですが、筆者は入試に合格したわけではありませんし、学費もお払いしていないわけです。

しかし、2021年にはじめて総合基礎実技に参加させていただいた時には、意外なほどに新入生たちの浮遊感と筆者のそれとは同調していったようにも思います。あえて言葉にするならば、親や社会の不条理な波に翻弄されている子供と半ボケのおじいちゃん、といった感じでしょうか。そうして、筆者が美術の基礎的な技術を身につけておらず、いわば自身の「できない」ことに向き合わなければなかったことも、後でも述べますように筆者には厳しく、また素晴らしい経験となりました。半世紀も年齢の異なる若い人たちと一緒に、みすぼらしいものに魅かれたり、創ることだけではなく壊すこと好きであったり、キラキラとしたコミュニケーションよりもどこか静かなまなざしのようなものが良かったりすることを共に体験したのだと、勝手に思い込んでいます。

### 4. 社会が身体の言葉を受け入れること

前述のように、アーティストにとっては「あたりまえ」であるはずの知恵にも、言葉による説明が必要な時代になってきたのだと思います。しかし、この知恵を伝える言葉は、逐次的に意味を伝える伝達的な表現ではなく、身体にぶるぶると共鳴する詩のような表現なのだろうと思います。詩人の吉本隆明（参3）は、言葉には意思を伝える指示表出と、身体的な自己表出があり、指示表出は言葉の枝葉であり、言語の根幹は無言に近い自己表出にあるのだ、と述べています。筆者は吉本隆明ほど強く言語に寄り添っているわけではありませんが、身体にぶるぶると共鳴した体験があります。たとえば、美しいと思っていたものごとの相当部分に既成の価値観が入り込んでいて、それが実感ではなく幻想や演技のようなものであったのだという気づきは、総合基礎実技の中では頻回に体験しました。そして、目標を定めてその最適化を行う科学・技術的な「役に立つ」にも、同じように既成の価値観が入り込んでいて、幻想や演技のようなところもある、と感じています。ただこれはあくまで身体的・詩的な表現であって、幻想や演技を否定しているわけではないことがとても重要なのだろうと思います。

たとえば、筆者は古巣の科学・技術分野の人たちの集まりに顔を出しては、「本当にそんなことをしたい

のですか?」「完成度云々の前に「質」を考えましょう」と、総合基礎実技で先生方から投げかけられてきた言葉を吟じてみることがあります。前述のように、科学・技術においてはまず目的が設定されていますので、その目的をひっくり返してしまう（ちゃぶ台返しをしている）ように受け取られて、ひどく嫌われる時もありますし、また、本質に目を向けることができた、と歓迎される時もあります。「本当にそんなことをしたいのですか?」という身体的・詩的な言葉は、相手への贊否を表明しているわけではないのですが、言葉を定義して、つまり違いをはっきりとさせて取捨選択をする指示表出を使い慣れている人たちは、自分の意見が否定されたように感じてしまうのだろうと思います。

何度も繰り返しますが、京都芸大の総合基礎実技には科学・技術の現場や現代社会全体が失いかけています「人間らしさ」(註\*)に至る知恵が隠されていると思います。けれども、その知恵を受け取るためにには、社会全体が、身体にぶるぶると共鳴する詩のような身体の言葉に慣れていなければなりません。それはとても難しいことなのだろうと思います。

## 5. 目の前にモノを置くこと、楽しむこと

筆者は、身体の言葉を、いままでに総合基礎実技で習っているわけですが、3年間経験した今もまだ前途には遠い道のりが残っています。たとえば、筆者は小中高校や大学、そして企業研修などで、医工学に関連した講義を続けています。総合基礎実技への参加を始めてからは、講義でもその内容の紹介をしたり、時には授業の真似事をしてみようとするのですが、どうしても科学・技術の言葉と身体の言葉との間にギャップを作ってしまいます。ワークショップの形式で、実際に「モノ」に接しても、たとえば画材やモデルを置いただけでは、それは「描け」という命令になってしまいます。京都芸大の先生方は、自然にヒトが寄り添うようなモノ(道具、刺激、そのタイミング、)や環境を、実際に試作・試行しながら何日もかけて準備します。筆者もその努力は惜しまないつもりなのですが、目の前にモノを置いて、そのモノとの間に立ち上がってくるであろう様々な「わたし」や「いま」を想像して楽しむところまではなかなか到達できません。この、目の前にモノが置かれ、モノに寄り添って「わたし」や「いま」を発見していくことは、現代社会の

中ではあたりまえではなく、とても貴重な体験なのだと思います。

## 6. ヒトに寄り添うモノ、と、モノに寄り添うヒト

ヒトの能力を科学技術の力で向上させることを「人間拡張」と呼び、現代の科学技術振興策の一つの大目標となっています。持丸正明はそのことを「ヒトに寄り添うモノ」と表現して、様々な未来型の研究を紹介しています(参4)。まず技術的な目標を設定してその目標に到達するための最適化を行うのが、その基本的な方法論であり、それは筆者が医工学分野でやってきた方法でもあります。以前には、目標達成に向かうモチベーション自体を研究の対象とするることは稀であったのですが、心理学などを含めた多分野の研究者が融合して多角的な視点が導入されると、そもそも設定された目標に対してどのようにモチベーションを形成させるのか、といったところにまで研究者が設計するようになりました。

かつて産業革命(註\*\*)において、「できる」というヒトの機能が強力にサポートされることの裏側で人間性がより一層求められました。現代における人間拡張技術も、その裏側において「人間らしさ」(註\*)への渴望を爆発させるのだと、筆者は予測しています。

総合基礎実技において学生たちはモノや環境の周囲をウロウロして身体で感じたり、時には壊してみたりしながら、それぞれがそれぞれのやり方で自分を発見していきます。もし評価の高いモノを創ることだけが目的であるならば、教師の世界観や技術の真似をすればいいのかもしれません。けれどもそれでは、評価を最大化させるAIロボットを作っているようなものだと思います。総合基礎実技では、先生方が「できる」ところをあまり見せないところがすごいのだと思います。そして、それぞれ自身の身体における意味を楽しみながら学生に表出し、学生もそれぞれ自分の身体における意味をさがします。

身体はみな異なりますので、作品を評価する定まった物差しなどは、本来はないはずです。ただ、たとえば吉本隆明が「この作品の意味はわたしにしかわからない、と多くの人に思わせるのが芸術的価値だ」(参5)と述べているように、それぞれが唯一無二であることを感じさせる「存在感」「奥行」「かおり」「集中力」などなど、がモノから感じられるならば、それは一

つの基準であるのかもしれません。ただ一つの基準で優劣を評価するのではなく、また強い世界観に追従するのではなく、モノに寄り添って多様な世界観が育っていく有様を無言で見守る姿勢こそ、科学・技術が見習うところなのだと思います。

## 7. 「できる」の麻薬的な習慣性

さて、誤解されることを恐れず、もう少しだけ身体の言葉に関して話を進めてみます。たとえば、自転車に乗れる、という機能や行動はプログラムとしてロボットなどにコピーできますが、自転車に乗れた時の喜びや、自転車に乗れないという焦燥はコピーできません。つまり、「できる」という機能や行動よりも、できない自分に向かうその時々の「いま」の心の動きの方がよりリアルであり、より人間的であるわけです。けれども、「できる」という機能獲得の喜びはとても大きいため、私たちはどうしても「できる」という機能ばかりを心に残してしまうのだと思います。赤ん坊のころから、私たちは「できる」ようになることの喜びを一つの原動力として生きてきました。さらに現在では「できる」という機能がAIなどによって強力に補助されようとしています（参6）。この「できる」ことの麻薬的な習慣性を離れて、「できない」にしっかりと向き合うことこそが、ここまでお話してきました「人間らしさ」（註\*）に至る一つのコツなのかもしれません。社会がIT技術などに支えられて「できる」に向かって邁進するその反動として、私たちは、たった一回の、唯一の「わたし」や「いま」のリアリティに向かうことになるのではないかと思います（参6）。そうしてそれは、「わたし」や「いま」がすでにあるのではなく、影響・作用（アフェクト）されることの中に「わたし」や「いま」が立ち上がりてくるのだ、という、世界の見方の根本的な転倒を受け入れることもあります（参7）。

## 8. 「できない」にゆっくりと向き合う「人間らしさ」

前述のように、筆者は美術の基礎的な技術を身につけずに総合基礎実技に参加しました。たとえば、描く課題に対して「描けない」という状況は絶望的なのですが、身体の詩として「できない」に向き合うならば、それは新しい世界への入り口でもあります。たとえば

身体に墨を塗って魚拓ならぬ人拓をしてもいいですし、脚で描いてもいいですし、また、へたくその方が良いと感じる身体もあります。つまり、「できる」という機能や行動よりも、「できない」わたしに向か合った心の動きの方がよりリアルであり、より「人間らしさ」（註\*）にあふれているわけです。

ここで、筆者が基礎実技への参加を強く願った本当の理由は何だろうか？と、今一度自身の身体に問うてみると、筆者が心の内に秘めている得体の知れない不吉さのようなものも、吐露しなければならないと思います。それは、深夜に時々現れる、言葉に表しがたい純粋な絶望のようでもありますし、また、いつも社会や自分自身からせかされている焦燥でもあります。しかし、総合基礎実技で経験した、ウロウロと徘徊すること、コツコツとモノに寄り添い、身体が発見し続けること、そして、自分の「できない」をゆっくりとみつづけることによって、得体の知れない絶望であった何かが、逆に創造の源であるように自覚できるようになってきました。兎にも角にも、これまで「できる」を目的とする集団の中ではいつもどこか「変人」であった筆者（参2）は、ここ京都芸大に来て初めて本来の居場所を見つけた感があるわけです。何が目的ですか、と聞かれても「えーと、夢中だったので何が目的か忘れてしました」などと笑顔で応えられる場が、ここ京都芸大には在るように思うのです。

## 9. お金のおはなし

2023年10月に、様々な社会の思惑を背負って京都芸大は京都駅の近くに移転しました。「ほんまかいな」と驚いている間にも、新しい価値を求めて動き出している社会の波が、京都芸大にも押し寄せているわけです。総合基礎実技が内包している知恵が、有用、快適、便利、安全、、とは異なる価値を模索し始めた現代社会にとても重要であることは明白だと思います。けれども、筆者を救ってくれている京都芸大のこの環境は、常に説明を求める社会という大海の波の圧力に耐えることができるのでしょうか？社会がアートに成果を望むとき、私たちは「できる」という麻薬のような習慣性に打ち勝って、自分の「できない」にゆっくりと向かい合って質を育む環境を維持できるのでしょうか。

かく言う筆者も、ついこの間までは目標を設定して最適化を行う集団の一戦士でありました。兜を脱いだ

つもりでいても、腕や腹には、まだまだたくさんの防具や武器がこびりついています。新校舎の屋上にできた土の運動場の真ん中でゴロンと寝転がって東の山々を眺めていても、頭に浮かんでくるのは「ここにヒトを集めて、会費制のワークショップやコンサートを開いたらば、、」などとよこしまなことばかりです。

一方において、他の分野に比べると、芸大生は比較的多額の実習費用を負担しなければなりません。実習にかかる時間は比較的自由であっても、たとえばグループ制作ではアルバイトで生計を立てている学生さんは肩身の狭い思いをしなければならないかもしれません。筆者の経験では、自活に近い生活をしている人ほど、「お金がない」「困っている」とは口に出して言わない傾向があるように思います。「優秀な成績」の判断が難しい芸術大学には、一般的の奨学金制度とは別のタイプの学生支援や海外渡航援助が必要であるように感じています。若い芸術家たちが、家の貧富にかかわりなく、少なくとも在学中は生活の心配をせずに、ウロウロと徘徊して身体で発見したり、周囲の世界観に迎合せずに自分の「できない」にゆっくりと向かい合うことができるようなお金のシステムが必要であるように思います。お布施を集めてお説教をする仏教のサンガ（出家）は、やりたいことを一生かけて追求するためのシステムなのだ、と仏教学者の佐々木闇（参8）は言っています。アートの購買も一種のお布施と捉えることも可能なかもしれませんし、また、芸大にはもう少し出世的な、先輩が後輩の自由な世界観構築を助けるようなシステムが加わってもいいのかもしれません。

## 10. お互いに「わかるうとする他者」であること

AIなどの情報技術の発展によって「わかる」や「できる」の多くが技術によって強力にサポートされるようになってきました。複雑化巨大化しつつある現代社会においてそういった「人間拡張」は必要不可欠になります。前述のように現代における情報革命は、かつての産業革命（註＊＊）を上回る大きな変化を社会に与えるのだと思います。たとえば、健康が最適に管理され、意欲の向上や行動変容が設計される近未来社会においては、そういった「できる」によっていわゆる自己疎外（註＊＊＊）に陥る病理も生じてくるのだと思います。生活が設計管理されるとき、その

適切さを「わかり合う」ことが重要ですが、それ以上に、それでお互いが唯一無二の存在であることを「わかるうとする」他者がいることが求められるのだと思います。この、「わかりあう」よりも「わかるうとする」他者であることは、メンタルヘルスにおける治療者の重要な姿勢もあります。現代社会が「できてしまう」という病理に冒されつつあるのならば、アート教育の実践者たちはその治療者でもあるのかもしれません。

感性において、それぞれの「わたし」はみな異なる唯一無二の世界観の中にいて本来的に孤独なのだと思います。繰り返しますが、説明や共感によって「わかりあう」だけではなく、それでお互いが「わかるうとする」他者であること、つまり、わかり合えないことの哀しさをみなでゆっくりと楽しんってしまうような方法があることを、筆者はアート教育の実践者たちから学びつつあるのだと思います。

ウロウロしろ、本当にそんなことしたいの？妥協するな、と叱咤激励される学生さんたちは、自身の世界観に巻き込もうとする人たちからみると「面倒くさい人」なのかもしれません（参9）。けれども、この面倒くささを受け入れて、皆で楽しんしまうところにこそ、「人間らしさ」や「質」を育みながら発展する唯一の方法論があるのかもしれません。

新校舎での新学期が始まり、新しい授業環境を整えるために先生方が七転八倒しているのをしり目に、大学構内をウロウロと徘徊していますと、あちこちで、何かに無心に取り組んでいたり、みんなでなにかに徹底的にこだわってみておもしろがっていたり、時には激しい口論をしたり、居眠りをむさぼっていたり、要するにそれがそれぞれの人間らしい存在を求める活動がもう始まっています。総合基礎実技の同級生たち（今はみな先輩ですが）と出会うと、笑顔で手をふってくれます。ああ、この人たちに筆者は支えられているのだなあ、としみじみ感じたり、それぞれの専攻でいろいろな「できる」を身につけて いるのだろうなあ、などと羨ましく思ったりしながら、いつかどこか（もちろんのこと大学の敷地の外）で一杯やろうな、などと心の中でささやいているわけです。

### 【註】

\* 「人間らしさ」(Smell of Humanness) :

一般的に用いられる言葉ですが、本文章中では特別の意味に用いています。現代では、AI (Augmented Intelligence) などの登場によって、ヒトの理性的な機能が強力に補助されるようになってきました。筆者は、その反動としてより感性的な側面が重視されるだろうと予測し、これを「人間らしさ」と表現しています。人間らしい強い存在感があることではなく、存在を求めて彷徨っている感覚です。なお「人間らしさ」の直訳は Humanness ですが、ある価値観から見るとカッコ悪いような、一見ネガティブな要素も除外しないために、英訳は Smell of Humanness としました。

\*\* 「産業革命」(the Industrial Revolution) :

19世紀初頭の産業革命においても、「できる」というヒトの機能が強力にサポートされることの反動として人間性がより一層に求められました。この時期に、ルイ・ヴィトン、ブルガリ、エルメス、ティファニー、バーバリー、カルティエ、ゲラン、資生堂、キールズ、伊勢半、カネボウ、花王、といったブランドが形成されたのもその一つの表れかもしれません。かつては「ヒトに寄り添うモノ」を創り出すことが産業革命への反動でしたが、現代における「人間らしさ」では、「モノに寄り添うヒト」が重視されるのだろうと思います。モノから、ヒトを含む関係性に対象が変化し、そこに唯一無二の「わたし」や「いま」が発見される関係性が創り出されるでしょうし。また、ブランドの概念自体が大きく変化して、たとえば一見カッコ悪くても、それぞれが生かされる個別の仮想空間なども、web3.0などの技術によって可能になるのだと思います。

\*\*\* 「自己疎外」(Entfremdung seiner selbst) :

ヘーゲルが唱えた概念で、ある存在が、自己の内にある自己の本質であるものを外化（対象化）し、他者としてよそよそしいものとしてみなすこと（『哲学事典』（平凡社）より筆者が要約）。「自己疎外」の概念は時代とともに変遷をしており、筆者の予測する「人間らしさ」を重視する時代では、AI (Augmented Intelligence) にはできない、

より感性に近い身体的な意味として解釈されるのだろうと思います。

### 【参考文献】

- 1 富田直秀, 2022, アート視点から見た科学・技術（「質」を実現する日本の方法論「型」）, 応用物理, 第91巻8号
- 2 市岡孝朗・伊勢田哲治・土佐尚子・嶺重慎・富田直秀, 2020, 『もっと! 京大変人講座』第5章: 「できない」から「できる」んだ。三笠書房, pp. 219-263
- 3 吉本隆明, 2001, 『言語にとって美とは何か』, 角川ソフィア文庫
- 4 持丸正明, 2021~, 人間拡張センターHP  
<https://unit.aist.go.jp/harc/>
- 5 吉本隆明, 2000~, 吉本隆明の183講演A183(T), 芸術言語論—沈黙から芸術まで  
[https://www.1101.com/yoshimoto\\_voice/speech/text-a183.html](https://www.1101.com/yoshimoto_voice/speech/text-a183.html)
- 6 郡司ペギオ幸夫, 2018, 『生命、微動だにせず』青土社, p. 8「我々は、主観的にしか意味を持ち得ない『このわたし』という問題に向かうことになる。それ以外の評価可能な問題はすべて人工知能が解決するだろう。」
- 7 西井涼子・箭内匡（やないただし）編, 2020, 『アフェクトゥス（情動）——生の外側に触れる』, 京都大学学術出版会, p. 3「存在とは影響・作用されることの中で生まれ、そして崩壊し消えていくことそれ自体である（後略）。」
- 8 佐々木闇, 2015, 『出家的人生のすすめ』(集英社新書)
- 9 富田直秀, 2021, 「隨想：面倒くさい人間であること」(京大工学広報) No. 76  
<https://www.t.kyoto-u.ac.jp/publicity/no76/essay/6o3guw>